

京都の散歩道 (2) 愛宕山と比叡山

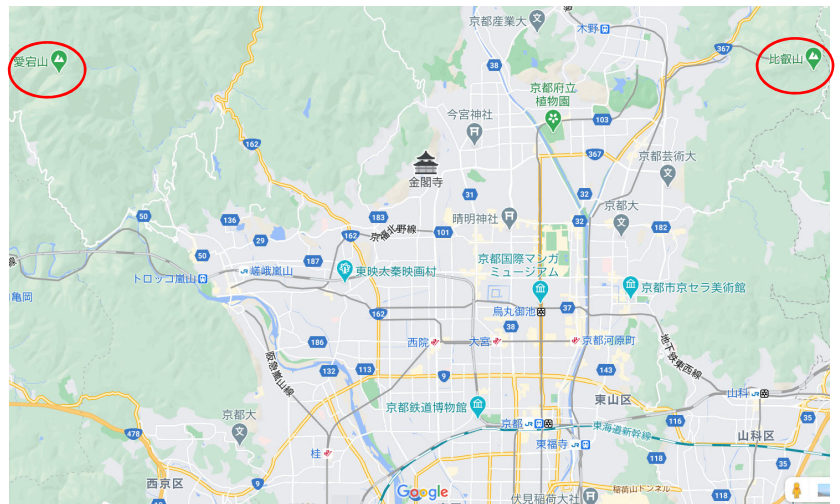
先月は左京区北端の三国岳を話題にしましたので、今月はその延長で山について取り上げたいと思います。

京都の人にとってまず思い浮かぶ山といえば、西の愛宕山(924m)と東の比叡山(848m)でしょう。特に、愛宕山は京都市で一番高いと思っておられる方も少なくないようですが、高さでは皆子山(971m)、峰床山(970m)、地蔵山(948m)の次です。なお、比叡山については

「厳密に言えば、比叡山という山はない。北から水井山(みずいやま、七百九十四メートル)、横高山(よこたかやま、七百六十七メートル)、三石岳(さんごくだけ、六百七十五メートル)、大比叡(おおびえ、八百四十八メートル)、四明岳(しめいがたけ、八百三十五メートル)の総称である。一番高いのはその名の通り大比叡。しかし、これは京都側からは同じ峰続きなので、手前の四明岳の陰になって見えない。だから、京都で比叡山といえは四明岳ということになっている。市内あちこちの見る位置によっててっぺんの形がちがうのは、この大比叡と四明岳の重なり具合が原因なのだ。」(倉部きよたか、『京都人は日本一薄情か』、文春新書、2005、p.81)

とのことです。

地図で見ると愛宕山と比叡山は岩倉の京都国際会館とほとんど同じ緯度で西東に並んでいることも分かります。何かと対比される愛宕山と比叡山については、京都で育った子どもなら一度ならず聞かされる昔話があるそうですね。



「幼い頃に祖母がこんな話を聞かせてくれたことがある。昔、愛宕山と比叡山が背比べをした。結果は愛宕山の方が少しだけ背が高かった。悔しがった比叡山が愛宕山を殴った。しかし振り下ろしたゲンコツが一番高いところから少しだけ逸れてしまった。その結果、愛宕山には窪みができたが、背比べでは比叡山が負けてしまったという。これは京都の町の東西に聳える比叡山と愛宕山との関係を知る上で示唆に富んだ昔話である。話の背後には、比叡山延暦寺と愛宕修験との競い合いが秘められているのだろうか。」(鵜飼均編著、『愛宕山と愛宕詣り』、京都愛宕研究会、2004、pp.4-5)

「愛宕山の祭神は中世に入ると、後の縁起にあるような具体的な名を持つ祭神となってあらわれるようになる。(中略)このように、呪詛や恨みといった怪しさをもって愛宕山や天狗が語られていることが注目される。ここから考えられることは、当時の愛宕山が、中央ではなく少し異端の位置付けであったことである。現任京都でよく語られる、愛宕山と比叡山が喧嘩して、比叡山が叩いて愛宕山のこぶができたという話は、比叡山と愛宕山の権力闘争、更に言えば愛宕山が敗れたことを示唆するとも考えられる。」(同、pp.24-25)

編集人